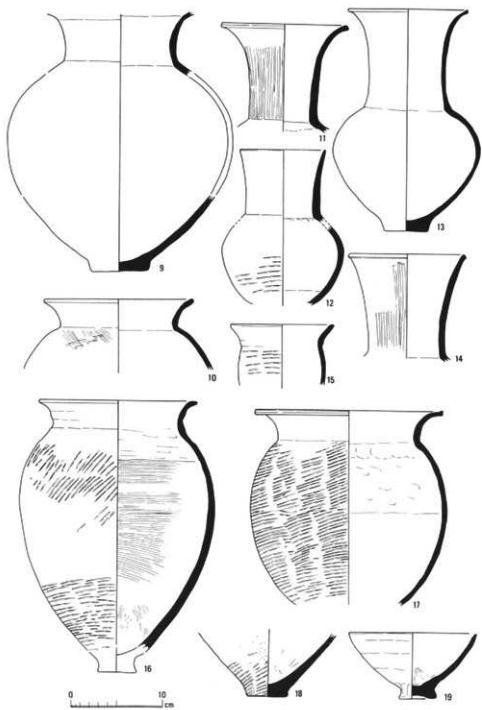


第23図 C地区出土土器(1)



第24圖 C地区出土土器(2)

7は頸部の上半と口縁部を欠損する。底部の直径5.50cm、残存する器高28.8cmをはかる。ややいびつであるが球形の体部を有する。体部外面には横方向のハケ目の後に下方では縦方向、上方では横方向のヘラミガキが施される。体部内面はなでた後ハケ目が施される。頸部との境には指頭圧痕が残る。なお頸部の外面には波状文らしいものが認められるが残存部が少ないことと磨滅が著しいことから確定はできない。色調は外面が浅黄橙色、内面は黒色を呈する。肩部には黒斑が認められる。8は口縁部の直径20.5cm、底部の直径5.40m器高34.0cmをはかる。球形の体部と内彎ぎみに外傾する。頸部と口縁部を有する。口縁端部はやや上方へちあがり尖りぎみである。底部の内外面には指頭圧痕が残る。器壁の磨滅が著しく調整は不明である。色調は外面が灰白色、内面が灰黄色を呈する。体部の中央に黒斑が認められる。

9は土器量はほぼ一個体分存在するが接合は不可能である。このため体部は復元して図化した。底部の直径5.90cmをはかり球形の体部を持つと推定される。頸部は内彎ぎみに外傾する。色調は外面が橙色、円面は浅黄橙色を呈する。体部下半には黒斑が認められる。

長頸壺 11~14が長頸壺である。

11は体部を欠損する。口縁部の直径13.3cm、頸部の長さ10.3cmをはかる。やや外傾ぎみに直立してのびる頸部と大きく開く口縁部を有する。口縁端部はやや肥厚し端面は中央が凹む。頸部外面には縦方向のヘラミガキが施される。色調は外面が灰白色、内面は浅黄橙色を呈する。12は口縁部の直径8.90cmをはかる。球形の体部とほぼ直立してのびる頸部と口縁部を有する。端部は尖りぎみである。体部外面の下方には叩き目が残り、内面の頸部と体部の境には指頭圧痕が認められる。焼成は軟質で色調は外面が橙色、内面は褐灰色を呈する。

13は図化することによって全体の形状を知ることができる。口縁部の直径12.8cm、底部の直径4.60cm、器高23.7cmをはかる。下方はすぼむが球形に近い体部を有する。頸部は直立してのび口縁部に至って大きく開く。調整は剥落が著しく不明である。色調は外面が浅黄橙色、内面はにぶい黄橙色を呈する。14は口縁部の直径12.0cm、頸部の長さ10.4cmをはかるが体部と底部を欠損する。外傾してのびる頸部と口縁部を有する。口縁端部は肥厚しやや下方へのびる。11・13と比べて口縁部が大きく開かないことが特徴である。頸部の外面には縦方向のヘラミガキが施される。色調は外面が淡橙色、内面は橙色を呈する。胎土には結晶片岩を僅かではあるが含んでおり紀伊産と推定される。

壺 10・15~18が壺である。底部のみについては後に一括して報告する。

10は口縁部の直径15.6cmをはかる。体部の下方を欠損する。内彎ぎみに外傾する頸部とやや外反する口縁部を有する。口縁端部は丸くおさめる。口縁部はヨコナデ、体部には粗い右下がりのハケ目が施される。焼成は軟質で色調は外面が浅黄橙色、内面は橙色を呈する。15は口縁部の直径10.7cmをはかる小型の甕で、最大径は口縁部にある。口縁部は肥厚し外反する。口縁端部は丸い。体部外面には横方向の粗いハケ目が施され、口縁部にはナデが施される。焼成は良好で焼きしまっている。胎土は小石が多く色調は内外面ともに浅黄橙色を呈する。

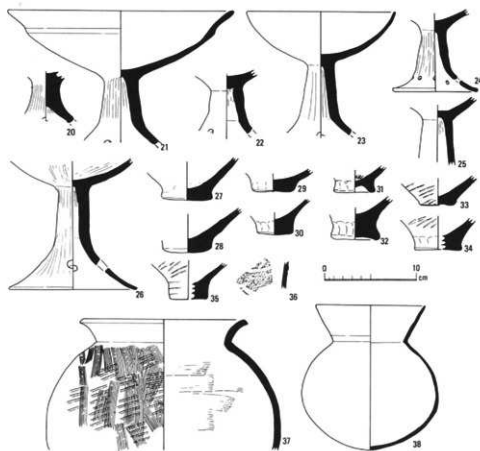
16は底部を欠損する。口縁部の直径17.0cm、復元した高さ29.0cmをはかる。最大径は体部のやや上方にあり20.9cmをはかる。卵形の体部を持ち口縁部は内彎しながら外側へ開き端部は水平方向へのびる。体部には中央部は剥落しているが上方では左下がりの叩き目、下方では横方向の叩き目が施される。内面は下方が縦方向へハケ目、上方は横方向のハケ目が施される。肩部の内面はケズリ調整が認められる。焼成は良好で色調は外面がにぶい橙色からにぶい黄橙色を呈し内面は橙色を呈する。体部のほぼ中央に黒斑が認められる。

17は口縁部の直径19.8cmをはかる。最大径は体部のほぼ中央にあり21.1cmをはかる。球形の体部と肥厚して内彎ぎみに外へ開く口縁部と水平方向に大きく開き内面が段となる口縁端部を有する。端部の断面は凹む。体部の外面にはやや左下がりの細かい叩き目が施される。口縁部の内外面と体部下半の内面はナデ調整が施され、体部内面の上方は指もしくは板状の工具によるナデが認められる。口縁部と体部の境の内面には指頭圧痕が残存している。色調は内外面ともに浅黄橙色を呈する。なお次にのべる18の体部下半は同一場所から出土している。現状では接合面はないが胎土・色調ともに酷似しており同一個体である可能性は極めて高い。18は甕の体部下半である。底部は平底で直径4.20cmをはかる。外面には底部にまでおよぶ左下がりの叩き目が施され内面はナデ調整が施される。焼成は良好で色調は内外面ともに浅黄橙色を呈する。

鉢 19は鉢で完形品である。口縁部の直径13.5cm、底部の直径3.80cm、器高7.10cmをはかる。上げ底の底部と内彎ぎみに大きく開く体部と口縁部を有する。口縁端部は鋭く尖がる。体部外面はナデ調整が施されるが粘土紐を輪積にした痕が明瞭に残る。体部内面には板状の工具によるハケ目が認められる。底部外面には指頭圧痕が明瞭に残る。焼成は良好で色調は内外面ともに灰白色を呈する。口縁部から底部にわたって黒斑が認められる。

高環 20～26が高環である。

20は高環の脚柱部である。内彎しながら下方へ大きく開く中実の脚柱部を有する。外面



第25図 C地区出土土器(3)

には縦方向のヘラミガキが施される。円形の透し孔が4ヶ所に認められる。色調は灰白色を呈する。21は裾部を欠損する。口縁部の直径23.9cm 現存する高さ14.2cmをはかる。下方に直線的にのびる中空の脚柱部を持ち裾部は屈曲する。脚部外面は縦方向のヘラミガキが施され内面にはシボリ痕が残る。裾部には円形の透し孔が3ヶ所に認められる。坏部は外上方に大きく開いた後緩やかに外彎しながら屈曲する。口縁部との境は稜をなす。口縁端部は丸くおさめる。焼成はやや軟質で色調は外面が浅黄橙色から橙色、内面は浅黄橙色を呈する。22は脚柱部のみの出土である。坏部との接合は円板充填法による。円面にはしぼり痕が明瞭に残る。裾部には円形の透し孔が3ヶ所に認められる。焼成は良好で色調は内外面ともに浅黄橙色を呈する。

23は裾部を欠損する。口縁部の直径15.8cmをはかる。下外方に直線的にのびる脚柱部と大きく開く裾部を持つ。裾部には円形の透し孔が4ヶ所に認められる。脚柱部の外面は縦方向のヘラミガキが施され内面はシボリ痕が認められる。坏部は内彎ぎみに上方へ開く。端部は尖りぎみである。焼成は軟質で色調は灰白色を呈する。24は坏部を欠損する。下方に直線的にのびる脚柱部と大きく開く裾部を持つ。裾部の直径は9.10cmをはかる。脚柱部は中空で外面には縦方向のヘラミガキが施される。内面にはシボリ痕が残る。裾部には円形の透し孔が7ヶ所に認められる。焼成は軟質で色調は灰白色を呈する。25は坏部の上方と裾部を欠損する。中空の脚柱部を有する。焼成は軟質で色調は淡橙色を呈する。

26は坏部上方を欠損する。底部の直径13.3cm、復元した残存器高13.7cmをはかる。中空で垂直方向へのびる脚柱部と大きく開く裾部を持つ。裾部には円形の透し孔が4ヶ所に認められる。脚部外面と坏部の内外面には縦方向のヘラミガキが施され脚部内面の下方と裾の端部はナデ調整が施される。色調はにぶい黄橙色を呈する。

底部 27～35が底部である。

外面に叩き目を有するもの(33～35)と有さないもの(27～32)に大きく分けることができる。底部の直径は最も小さいもの(30)で3.80cm、最も大きいもの(27)で5.30cmをはかる。更に底部の形状によって細分することが可能である。色調は靉々灰白色もしくは浅黄橙色を呈する。

縄紋土器 36は縄紋土器の体部の小片である。弥生土器に混じって出土した。全体に磨滅が著しいが部分的に沈線が認められる。焼成は良好で色調は褐灰色を呈する。胎土中には雲母を多く含んでおり河内産の土器と推定される。縄紋は認められない。縄紋時代後期後半の所産であろうか。

上面の溝出土の土器 37・38は50-OR内の上層の講状遺構からの出土である。

37は口縁部の直径17.0cmをはかる壺である。体部の下方は欠損する。球形の体部と内彎しながら外反する口縁部を有する。口縁端部は外傾する。体部外面は左下がりの叩き目を施した後、縦方向のハケ目が施される。内面は横方向のハケ目、口縁部はヨコナデが施される。焼成は良好で色調はにぶい黄橙色を呈する。外面は全体にわたって煤が付着しており部分的に煮こぼれと思われる炭化物が付着している。38は丸底の壺である。球形の体部を有し口縁端部は直線で外上方へのびる。口縁部の直径11.7cm、器高15.7cmをはかる。磨滅が著しく調整技法は不明である。焼成は良好で色調は橙色を呈する。体部の下方には黒斑が認められる。

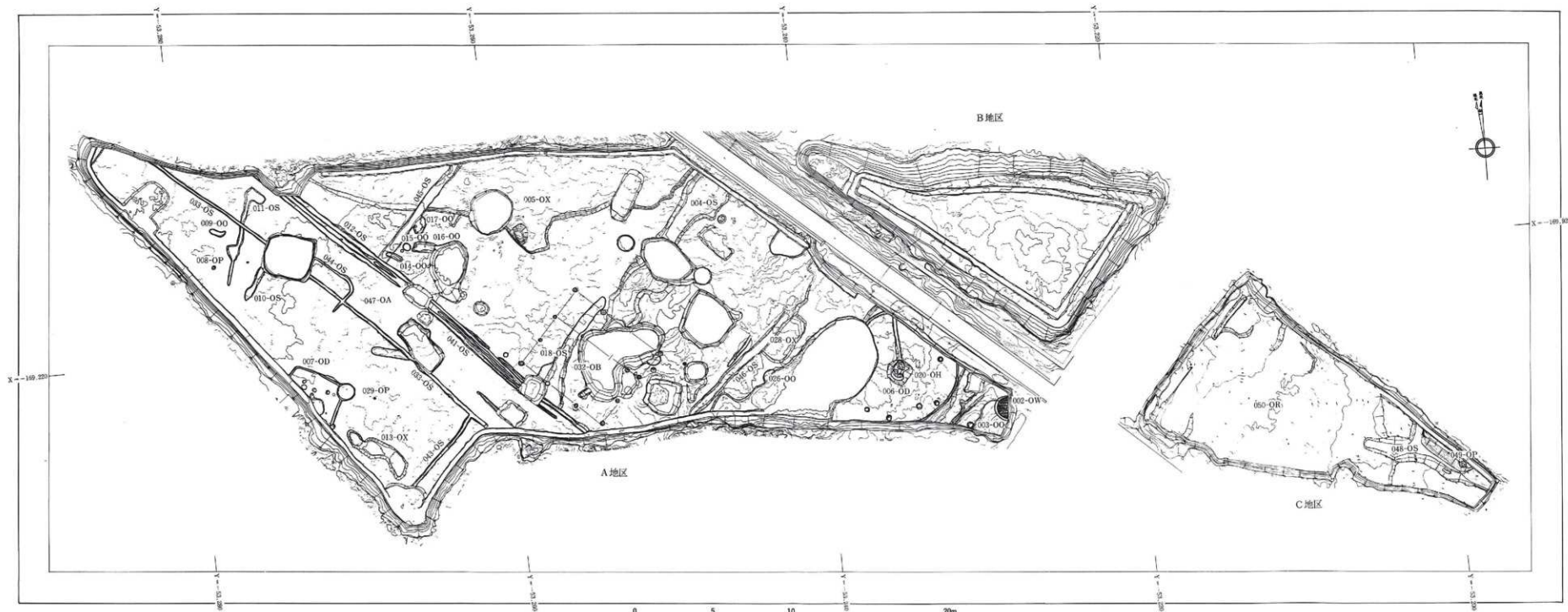
第V章 まとめ

今回の発掘調査で検出された遺構は大きくわけて弥生時代のものと中世のものに大別された。

弥生時代の遺構では特筆すべきものとして堅穴住居址があげられる。堅穴住居址は周辺の遺跡では軽部池西遺跡・西大寺遺跡・山ノ内遺跡でも検出されているが、いずれも弥生時代後期に属するものが主体であり、牛滝川の段丘上の開発がこの頃になって行われたことを物語るようである。ただこれらの堅穴住居址は、現在までの知見では大規模な集落を営むのではなく、数棟程度の規模で小集団を点々として形成していたと推定される。また、弥生時代に属する自然流路は、本遺跡(050-O R)をはじめとして近接する諸遺跡でも多くみつまっている。自然流路は概ね幅10mほどの規模で、方向や深さに規則性はないが弥生時代には現地形とは異なったかなり複雑な地形を呈していたと考えられる。なお、堅穴住居址と自然流路の位置関係をみると今木遺跡では近接して検出されているがこの傾向は隣接する諸遺跡でも同様である。おそらく自然流路が集落間の境界となっていたのであろう。出土する弥生土器について少しふれておくと、弥生時代後期でも後半に近い土器が主体を占めることが指摘できる。本文でもふれたようにわずかではあるが片岩を含む紀伊産と推定できる土器もみつかり、その数量は河内産の土器を越える可能性もある。この点については近接する諸遺跡との比較・検討を痛感するが、ここではその事実と紀伊産と推定される片岩を含む土器の色調が押しなべて橙色の濃いものであることを指摘するにとどめたい。弥生時代の遺構内からはごく少量であるが縄紋土器が出土する。いずれも後期から晩期のものであるが遺構に伴ったものではない。遺構の検出が今後の課題である。

中世の遺構は掘立柱建物と溝に大別された。いずれも同時期に共存したと推定されるが掘立柱建物をめぐる区画が約21m(70尺)で、屋敷地を形成していることが検証された意味は小さくない。この数字は今後の発掘調査の一つの基準となろう。また、道路(047-O A)については遺構は検出したものの轍や足跡も検出されておらず積極性を欠くが、幅3.0mと比較的大規模であることと本文でもふれたように同様の細長い地割りが延長線上に直線を呈し認められることから道である可能性は極めて高いといえる。

以上、思いつままに発掘調査によって得られた成果の一端についてのべた。残された問題は多岐にわたるがひとまず筆をおくこととする。



第26図 今木道跡平面図

付載 今木遺跡における花粉分析

川崎地質株式会社

1 試料および処理方法について

(財)大阪府埋蔵文化財協会により採取された8試料(試料採取地点、層順は第7図を参照)について花粉分析を行った結果を報告する。

分析処理の手順は第27図に示す花粉分析フローのとおりである。5ミクロン振動マイクロフィルターを使用することによって、粒径処理を確実にするとともに、処理過程の再現性を高めている。

作成したプレパラートを顕微鏡により400-1000倍の倍率で観察し、木本花粉で150-200個以上の検定、計測を行い、同時に出現した草木花粉の検定、計数も行った。しかし、ほとんどの試料で花粉化石の含有量が少なく、木本花粉の検定数が150個以上になった試料は、わずかに1試料のみであった。

2 分析結果

花粉分析結果を第28図に示す。花粉ダイアグラムは計数した木本花粉を基数にし、百分率で表した。木本花粉総数が150個に満たない7試料については出現した種類を*で表した。

試料No.1では、ニヨウ松亜属が79%と高い出現率を示し、スギ属、ハンノキ属、コナラ亜属を伴う。草木花粉では大型のイネ科が178%と高い出現率を示し、アブラナ科も53%を示す。試料No.3ではアブラナ科の出現する割合が大きく、総検定数460個体中の98%を占める。試料No.2と4は深は花粉化石の含有料が極端に少なかった。



第27図 花粉分析フロー

3 植性復元

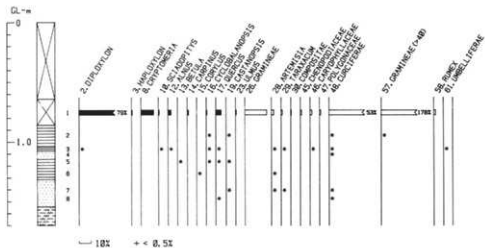
試料№1・3を除いては、十分な量の花粉化石の含有がなかったため、花粉分帯を行わなかった。

試料№1・3では、アブラナ科の花粉化石が大量に含まれることから試料採取地周辺にはアブラナ科の植物が生い茂った草原が存在していたと考えられる。あるいは、ナタネ等の栽培が行われていた可能性も考えられる。また試料№1ではアブラナ科に加え、大型のイネ科が大量に含まれることから、この時期には稲作の行われていた可能性が強い。以上のことから、旧耕土層堆積当時この地点は水田であり近くではナタネ等の栽培が行われていた可能性がある。遺跡周辺の丘陵から山地はマツの二次林で覆われており、スギの植林が行われている可能性もある。また、これより若干古い時期の2層堆積当時には、ナタネ等の栽培が旧耕土層堆積当時より盛んであったと考えられる。

4 まとめ

今木遺跡において行った今回の分析から以下のことが明らかになった。

- 1) 分析した8試料のうち、花粉帯設定に十分な量の花粉化石を含有していたのはわずかに1試料のみであった。このため花粉帯を設定することは不可能であった。
- 2) 旧耕土層堆積前後の遺跡周辺の植性が明らかになった。



第28図 花粉ダイアグラム

〔主要樹木花粉種類〕

2	Diploxylon	(ニヨウマツ亜属)
3	Haploxylon	(ゴヨウマツ亜属)
8	Cryptomeria	(スギ属)
10	Sciadopitys	(コウヤマキ属)
12	Alnus	(ハンノキ属)
13	Betula	(カバノキ属)
14	Carpinus	(クマシデ属)
15	Corylus	(ハシバミ属)
16	Cyclobalanopsis	(アカガシ亜属)
17	Quercus	(コナラ亜属)
19	Castanopsis	(シイノキ属)
23	Ulmus	(ニレ属-ケヤキ属)

〔主要草本花粉種類〕

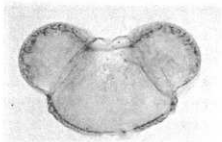
26	GRAMINEAE	(イネ科：40ミクロン以上の個体を除く)
28	Artemisia	(ヨモギ属)
29	Taraxacum	(タンポポ亜科)
30	COMPOSITAE	(キク科：ヨモギ属、タンポポ亜科を除く)

〔その他の草本花粉種類〕

45	CHENOPODIACEAE	(アカザ科)
46	CARYOPHYLLACEAE	(ナデシコ科)
47	Polygonaceae	(タデ科)
48	Curciferae	(アブラナ科)
58	Rumex	(ギシギシ属)
61	UMBELIFERAE	(セリ科)

表1 検出された花粉化石の種類一覧

Pinus ($\times 700$)



Pinus ($\times 700$)



Gramineae (>40) ($\times 1050$)



Cryptomeria ($\times 1050$)



Alnus ($\times 700$)



Castanopsis ($\times 1050$)



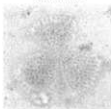
同左



Chenopodiaceae ($\times 1050$)



Craciferae



Gramineae (>40) ($\times 700$)

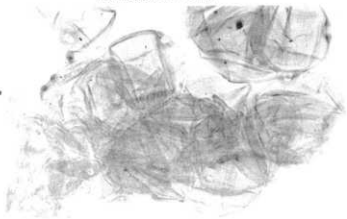
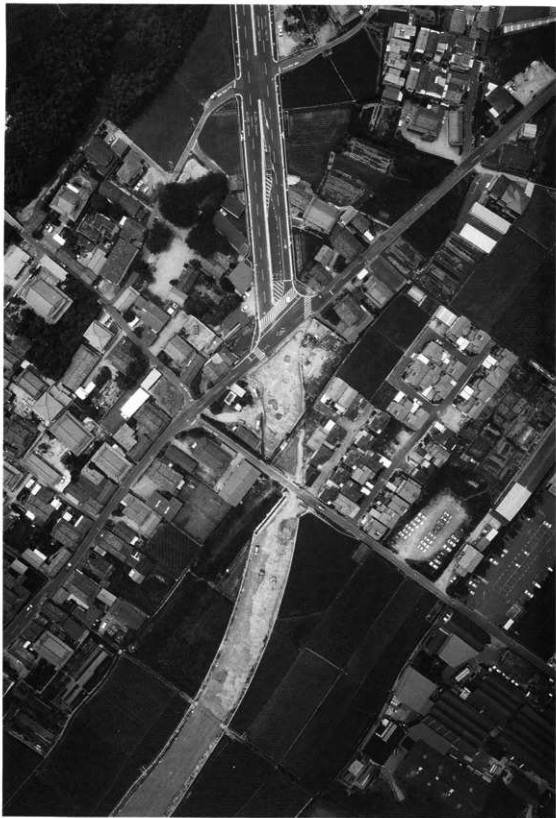


写真1 花粉化石

図

版

図版一 調査地と周辺の地形





図版三
A地区航空写真



南半部分



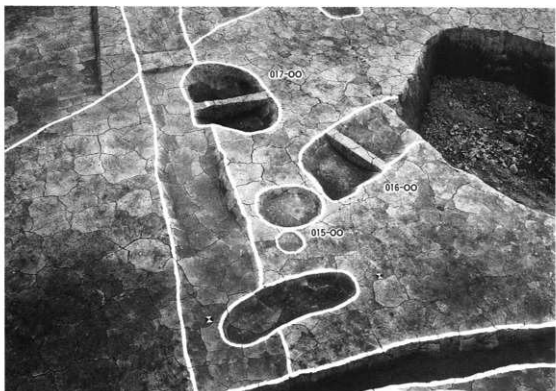
北半部分



006-OD (南から)



007-OD (東から)



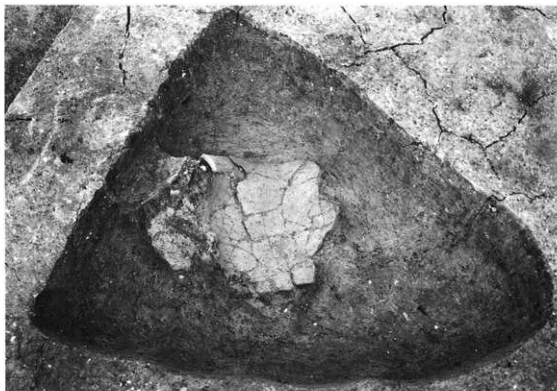
土坑群 (南から)



028-OX土器出土状況 (南から)



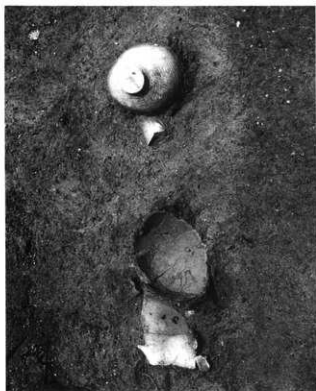
014-00、015-00（北から）



011-05、土器出土状況（西から）



004-O S (南東から)

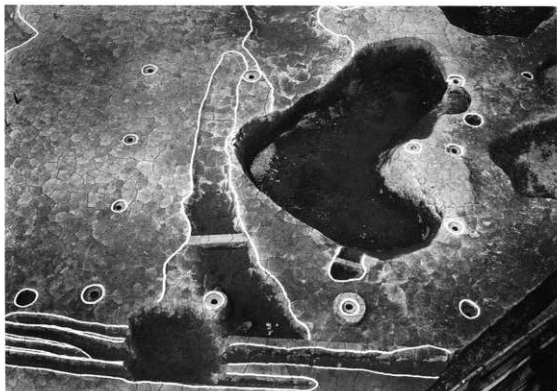


18-25

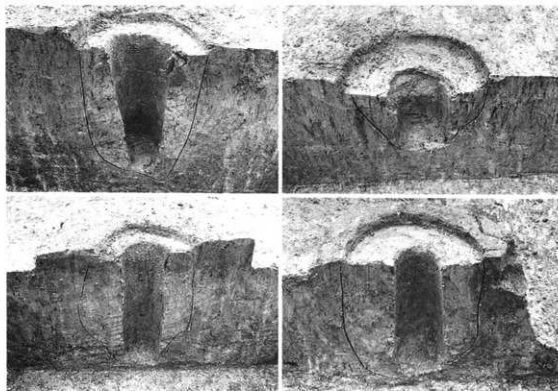


18-24

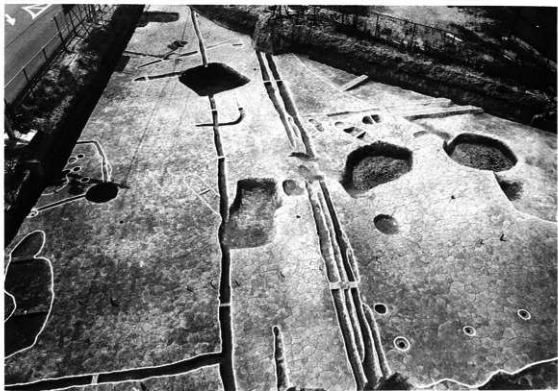
004-O S 土器出土状況(北から)と出土土器



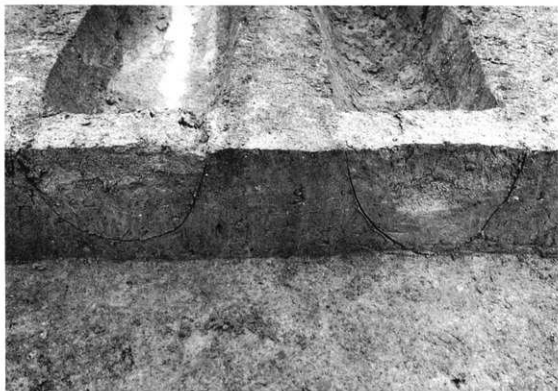
032-OB (南西から)



032-OB柱穴



047-0A (南東から)



047-0A北側側溝断面 (041-OS, 012-OS南東から)



002-OW (西から)



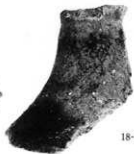
19-1



18-1



18-2



18-3



18-4



18-5



18-6

006-O D出土土器



18-7



18-8



18-9



18-10



18-11

028-O X出土土器



18-9



18-10



18-13



18-12



18-14



18-15



18-16

028-OX出土土器



18-26



18-17



18-22



18-19



18-20



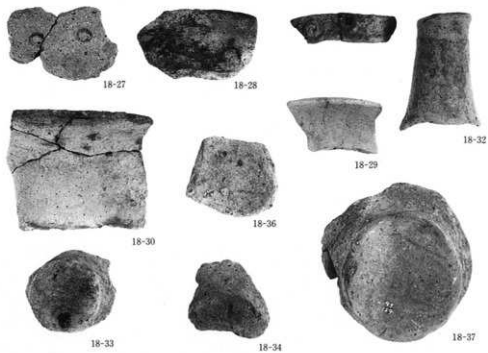
18-23



18-21

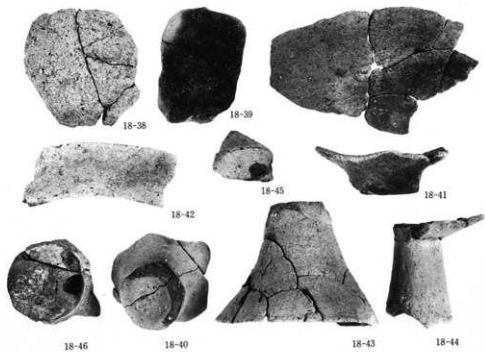


004-O S出土土器他

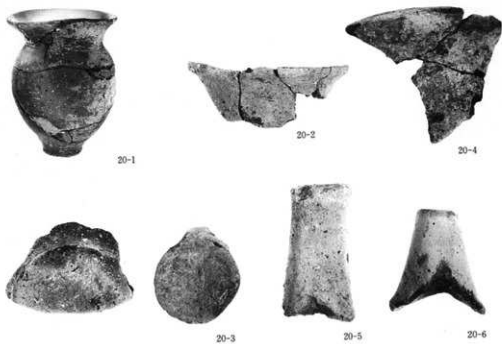


018-O S出土土器

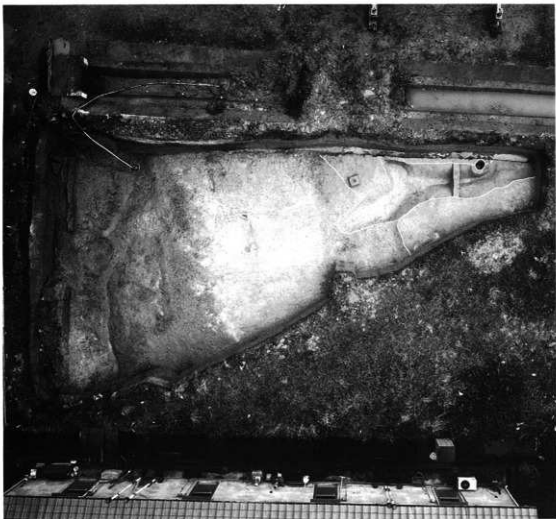




014-00、003-00、005-0X出土土器



包含層出土土器



C地区全景



048-O S断面(東から)



上 23-7
下 23-1

上 24-19
下 23-3、24-15



上 25-37
下 23-8

上 24-16
下 24-12·13



23-1



23-5



23-6



23-7



23-8



23-16



23-2



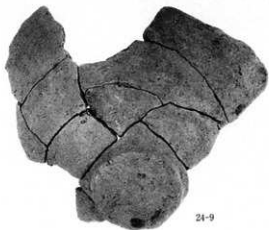
23-3



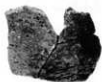
23-4



24-10



24-9



24-15



24-11



24-13



24-12



25-20



25-22



25-21



25-23



25-24



25-26



25-25



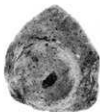
25-27



25-28



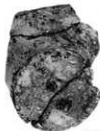
25-29



25-30



25-31



25-32

(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第36輯
都市計画道路磯之上山直線建設に伴う

今 木 遺 跡

—発掘調査報告書—

平成元年3月31日発行

編集・発行 財団法人 大阪府埋蔵文化財協会
大阪市中央区谷町3丁目2-20番地大手前ウサミビル

印刷 株式会社 中島弘文堂印刷所